

# 風土



初富士  
神蔵器

初日いま海真二つにしてとどく

元日の太平洋に凧一つ

初富士やいづこに立つも真正面

一丁の青岱墨か買初めに

扁額に「喫茶去」とあり水仙花

天に星咲きて地上のクリスマス  
クリスマス妻の時刻の第九かな  
桂郎の赤きマフラー畦をとぶ  
極月や水車一つが村の芯  
まんさくや村に一人の万能医  
伝説に小町の泉実千両  
西行の剃髪石や石露の咲く



# 竹間集

同人作品



寒 昂 橋添やよひ

立冬や届く壺切り一番茶  
茶の花のしづく一滴桂郎忌  
賜日和陵の空円かなり  
化野の石は仏や冬紅葉  
大根に隠し庖丁冬に入る  
田じまひの人影煽る炎かな  
寒昂大津皇子を眠らせて

艦の胴 南 うみを

露寒の冬瓜の蔓引きちぎる  
綿虫の高さにこゑを交はしけり  
かはらけのへらへら飛んで神の留守  
芦枯れて中州に芥乗りあげて  
冬霧の霽れていきなり艦の胴  
船渠をたいて  
茶晶の満開といふ昏さかな  
凍鮪がらから落とす港かな

肥後ことば 島谷 征良

木漏日もあらず白花ほととぎす  
少年野球に少女が二人さやけしや  
水引の行く秋の色かさねけり  
小鳥来る稀の家居をしてをれば  
秋深し口ついて出る肥後ことば  
波音に月は半分紅葉忌  
展望台ありて登高仕上げとす

つゆ草の枯れ

大竹 淑子

つゆ草の枯れても拜むかたちして  
生け花高野山、山形院二句は月輪御流冬の鵝  
護摩壇の濡れて日に在り散紅葉  
蹴轆轤へ北山風いたりけり  
鉄屑を積みて湖西、安曇二句デルタの麦二寸  
枯るる中道大うねりしてデルタ  
野良猫の一瞥白山茶花の散る

小 六 月

宮川みね子

竹林に聴く風十一月六日  
冬に入る一つの星のかがやきて  
古書店の扉のきしむ木の葉髪  
能面に微笑小春日和かな  
冬晴や大きな窓のレストラン  
一つづつこけしを拭ふ小春かな  
中空はまだ雨のいろ桃青忌

磯 焚 火

浜 福恵

浦に流離の仏を祀り磯焚火  
大枯野の辺や青きさしもぐさ  
七浦に一小学校冬ざくら  
ひと思ふ牡丹冬芽を手囲ひに  
悪茄子の辣を落して返り花  
鯉飛ぶや潮満々と基地の街  
分水嶺を越えてふたたび霧のなか

夢のかげら

山田 暢子

一山を燃やし紅葉の昇天す  
岩船寺枯野伝ひに浄瑠璃寺  
合掌を解き冬の陽に包まるる  
寒菊や永久に佇むほとけたち  
瞬くは夢のかげらか冬銀河  
白鳥来る錠剤ひとつ増えにけり  
白鳥の湖を傾げて着水す

## 群千鳥

— 鈴木 石花 —

白鳥の飛来未だに遠浅間  
常住の白鳥餌場に冬鳥  
雪催飛べぬ白鳥友を待つ  
枯るる中「色の彫刻展」とあり  
白壁の冬暖かき美術館  
室咲や色の彫刻「羽衣舞」  
木枯を来て子等と入る科学館  
着膨れて鏡の前に浮いてをり  
沼を見て育ちし花袋群千鳥  
鴨の声沼の辺に花袋の碑

# 山河集

同人作品



神蔵  
器選

枇杷咲きて棟方志功美術館  
安永 圭子

二歳児の指すコスモスや白匂ふ  
立冬やBGMのテンポあぐ  
枯はちす刈り取る業も神事かな  
文化の日いくたびも読む夫のふみ

工藤はるみ

てのひらに白息のこる芭蕉句碑  
姫りんご山の匂へる返り花  
冬うらら心遊ばす蓬菜橋  
夕闇の句碑に色添ふ冬紅葉  
九重の十一月の滝白し

浅田 光代

末枯れて雀の好きな樹となりぬ  
つつぬけの空やさくらの帰り花  
翁忌の紅を一気にひきにけり

枯るるもの枯れて明るきお寺かな  
綿虫のやうにふはりと人のそば

東山 眠る 裾廻の陶器市  
南奉 栄蓮

霜月や「与一洗ひ」に口漱ぐ  
卒寿に賜ふ梟皿や冬帽子  
神無月求む香炉の清水焼  
善哉を賜へり轆轤の隣りかな

大学へ道真つすぐや冬木立  
根岸 善行

小鳥より驚き易し烏瓜  
路面電車曲がれば早稲田時雨れけり  
剪る一枝残す一枝や冬来る  
熱爛といふしみじみとしたるもの

◇特別作品◇(抄)

## 秋拾ふ

大森 尚子

角館 武士の 灯した 初紅葉  
武家屋敷 巨木古木に 秋の 声  
秋気澄む 弓飾られし 蔵屋敷  
黒塀の 覗き窓 見る 秋思かな  
身はひとつ 湯治寄り 添ふ 秋の 風  
噴気孔 地の 声吹く や 秋の 天  
弁慶の 仁王 立ちなり 法師 蟬  
月見坂 登れば 浄土 秋の 風  
豊の 秋道を 譲らぬ 鴉かな  
天・地・人みちの くの 秋忘れまじ

# 風土独語／神蔵器



時雨るるや三千院経て寂光院

根岸 善行

三千院は、遠く平安貴族たちが、浄土欣求の願いをこめて営んだ寺である。本堂に安置された阿弥陀三尊の脇仏は、膝を折って正座（大和坐り）した姿で仏陀来迎を念じている。

寂光院は、平清盛の娘建礼門院が壇の浦合戦のあと、黒髪をたち切って仏門にはいり、念仏三昧の生涯を終えたところである。

壇の浦の合戦では、高倉天皇の第一皇子安德天皇（生母は建礼門院平徳子）は、二位尼（清盛の妻時子）に抱かれ、

「東に向って伊勢大神宮にお暇を申させ給え、この国は悲しみの多い世界です。あの海の下にこそ極楽浄土がございます」

と言われ八歳の天皇は尼に抱かれて入水された。

幅は狭いが桜並木の石段を登って門内に立てば、正面に檜皮葺きの落ちついた本堂が優雅な姿を見せ、右手奥から本堂の前に清らかな池庭が開ける。奥の池は岩間から落ちる小さな滝の水をたたえて澄み、渡廊を横切つて流れる水は再び小池となる。どこにも派手さはなく自然の中にとけこんでいる。

女院は三十一歳に剃髪出家され、建保元年（一一二一）十二月十三日、五十九歳で薨じ、寂光院の入口からなおわずか東の大原西陵が御陵である。

作者、善行さんは退職後、かえって多忙な日々を送られておられるようである。たまたま、一泊二日ぐらいの日程のやりくりがついた。京は作者にとつても観光のメッカであるが、二〇一二年のNHK大河ドラマ「平清盛」も終末に近づいていたので、洛北コース、三千院から大原の里を歩いて寂光院に至る道を選んだ。折から三千院の紅葉は美事、寂光院の時雨、もう何も申し上げる言葉がない。（以下略）

# 風土集



## 神蔵器選

下駄の音華やぐ京の時雨かな 上尾

根岸 善行

添水鳴つて静かさ戻す詩仙堂

しぐるるや賀茂の社へ川伝ひ 高槻

浅田 光代

時雨るるや三千院経て寂光院

「ゆく川の流れ」に鴨の諍へり

冬麗の朝の日を踏む疊かな

はるかより鴨来て水を疑はず

三本を五本に締めて酉の市

冬の川見尽くしけふは翁の日

一葉の眼の切れ長や菊香る 川崎

森田 節子

かたまつて遡りゆく鴨も人も 漢らの声凛々と鯨起し あきる野

佐山 五稜

観潮楼出てスカイツリー冬晴るる

朝市のふるさと訛り大焚火

帰り花旧町名の路地あるく

櫓の火の崩れて妻は夢の中

大熊手一葉館より出で来る

頬被り瑠璃戸ひとつの舟屋口

お多福の器量ならぶや酉の市

白鳥の水吊り上げて発ちにけり

車中より十字切る子や十二月 川崎

豎山 道助

山路手形舟路手形や関の秋 藤枝

間島あきら

亜浪忌の一本道の木曾路行く

ゆきゆきて芒と富士の大井川

余生とや肩の後ろに夜の霧

稲光夢二の女立ち上る

冬構十指一本づつ鳴らす

黒玉子剥けば真つ白秋澄めり

釣瓶落し線路は貨車に引つ張られ

雲梯の一所掴みて秋惜しむ